

第16回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 末木 文美士

東京大学大学院大学教授

第16回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会理事長）

2006年10月10日インド大使館

末木文美士博士は、昭和二十四（一九四九）年のお生まれで、東京大学で中村元先生の薫陶を受けて印度哲学を学ばれ、同大学院では、田村芳朗教授のもとで日本仏教を専攻されました。修士論文では法然を研究され、博士課程に進まれてからは、法然からさらに平安初期の仏教に遡って研究されました。その研究の成果を博士請求論文として東京大学に提出され、平成七（一九九五）年『平安初期仏教思想の研究』（春秋社）として出版されました。

この研究によって、従来に通説と異なり、平安初期は活発に諸宗の論争が行なわれた仏教全盛の時期であり、最澄や空海思想もその中から出てきたことを解明され、この時代の仏教思想が後の日本仏教の基礎となっていることを明らかにされました。また、末木博士は安然が比較的若いころに書いた著作を検討し、それによって従来から台密の完成者として知られていた安然が、即身成仏や草木成仏などの重要な思想の発展に大きな役割を果たしていることを明らかにされました。このような安然の思想は後の本覚思想に連なるものであり、日本的な仏教の源流ということができるとして、日本仏教思想研究に新生面を切り開くことに成功されました。本書に対しては日本印度学仏教学会から鈴木学術財団特別賞が授与されました。

また当時、鎌倉仏教に関しては、歴史学の立場から黒田俊雄氏が顕密体制論を提出され、また、仏教学においては、批判仏教の立場から本覚思想が批判されるなど、さまざまな議論が展開されていました。末木博士は法然や明恵の著作や天台本覚思想の文献を検討することにより、これらの新たな方法論的な諸説を、あまりに図式的な見方であるとして批判し、多様な動向がダイナミックに関連しあって展開する柔軟な鎌倉仏教観を示されました。その成果は、平成十（一九九八）年、労作『鎌倉仏教形成論』（法藏館）として出版されました。

末木博士は、このような個別的な研究だけでなく、日本仏教の流れを全体とし

て捉えようとして平成四（一九九二）年『日本仏教史』（新潮社）を出版されました。本書は新潮文庫としても版を重ねており、研究者のみならず、一般の読者にも広く読まれております。また、同年代の日本仏教研究者と協力して設立された日本仏教研究会と、その会を母胎として刊行したシリーズ『日本の仏教』は、日本仏教研究に学際的な方法を導入し、日本仏教研究の画期的な進展を促すこととなりました。

末木博士は、このような日本仏教研究を進める一方、その基礎として漢訳仏典や中国の禅籍に関する研究を進められました。その成果は、共同研究として、『現代語訳阿含経典・長阿含経』、岩波文庫『碧巖録』などに結実しました。これらは、漢文仏典を語学的に正確に読むという新しい方法を仏教研究に導入することになりました。関連する研究は、『観無量寿経・般舟三昧経』（『観無量寿経』担当）、『仏教——言葉の思想史』『「碧巖録」を読む』などの著作として発表されました。『仏教——言葉の思想史』では、主要な仏教概念が漢訳され、東アジアに広まる間にどのように変転するかを明らかにし、訳経史研究に新たな視点を提供されました。また、『「碧巖録」を読む』は、禅の文献を現代哲学の問題として捉えなおした新しい解釈として注目されました。

以上のような古典的な仏教文献の研究の他に、末木博士は、最近になって近代日本仏教の研究に精力を注ぎ、単に仏教史という枠の中だけでなく、近代日本思想全体にわたる問題提起を行なっておられます。その成果を『明治思想家論』『近代日本と仏教』の二著にまとめられました。そのうち『明治思想家論』は、島地黙雷から西田幾多郎まで、仏教と関係する明治の思想家たちの思想を検討したもので、それによって従来の日本近代思想研究が政治思想に偏っていた欠点を改め、じつは仏教が日本の近代の中で大きな役割を果たしていることを明らかにされました。

『近代日本と仏教』は、このような『明治思想家論』の個別研究に基づく一方、その中では論じられなかった大正以後、とりわけ昭和期の日本思想の中で仏教の果たした役割が論じられております。それによって、丸山真男など、これまで仏教と無関係と考えられていた思想家の仏教観が明らかにされる一方、アジアとの交流の中で、日本仏教が置かれた複雑な位置など、これまで研究が不十分であった領域に光が当てられることになりました。

本年に入って、末木博士は『仏教vs. 倫理』『日本宗教史』『思想としての仏教入門』の三冊を刊行され、さらに新著『日本仏教の可能性』がちょうど刊行されたばかりであります。『思想としての仏教入門』は、仏教を既成の概念から解放して、現代的な視点から見直した概論であり、『日本宗教史』は仏教だけでなく、

神仏関係を中心として日本宗教を歴史的に捉えなおした概論であります。それに対して、『仏教vs. 倫理』と『日本仏教の可能性』は、現代の状況の中で日本仏教がどのように生かされるかを探求したものであり、これまでのような思想史研究に対して、現代の哲学思想として仏教がどれだけ有効かを問うた意欲作であります。

従来の日本仏教の研究は、日本仏教思想の高揚期と目されている鎌倉時代を中心に研究がなされ、それ以外の時代の研究は等閑に付されてきているといっても過言ではありません。また研究方法の点から見ると、従来の日本仏教の研究は、歴史学および宗学を主要な研究方法としており、いきおい仏教学や近・現代仏教までを視野に入れた思想史や哲学の立場からする研究がきわめて遅れております。かつて中村元先生がつねに一番槍を目指されたように、末木博士もまた勇敢にも日本仏教研究史上の一番槍として着実に輝かしい成果を上げておられ、今後国際的にもますますの活躍が期待されます。

以上総括して、末木博士は今年度の中村元東方学術賞にもっとも相応しい研究者であると判断され、今回の授賞者と決定された次第であります。